

幼児の道徳性の芽生えに関する実証研究

—保育者における幼児へのかかわりを通して—

生活機構研究科 人間教育学専攻 修士課程 児玉京子

I. 問題の所在

近年、核家族化、隣人関係希薄化などにより幼児を取り巻く様々な状況や環境は多様に変化しており、現代の幼児の生活と育ちにおいて危惧される現状がある。特に、少子高齢化社会の到来と共に家族の形態と機能が大きく変化している。急速な経済成長を経て物資環境にも恵まれた時代に生まれた子どもたちは、このような社会の中で一人の人間として未来に対応した生き方を身に付け、自らの未来を切り拓いて行かねばならない。そこで、人間としての生き方を正面から追い求める道徳教育が必要になる。特に人格の基礎を創る幼児期において、いかに道徳性の芽生えを育てていくかがますます重要な課題となっている。

子どもたちの幼児期からの心の成長ということを考える場合、多くの深刻なる問題が存在している。家庭環境をめぐっては、先に述べた少子高齢化社会や核家族化等を背景に、一人っ子家庭が増えたことで兄弟姉妹同士が切磋琢磨することや、祖父母から学ぶなどといった生活面での実践体験の機会が減少してきている。親が子どもたち

へ接する接し方については、無責任な放任や、逆の過保護・過干渉といった傾向がかねてより指摘されている。また、地域社会においては、地縁的な連帯が弱まり、人間関係の希薄化が進むとともに、子どもたちの心の成長の糧となる生活体験や自然体験などが失われてきている。また、他者を思いやる温かい気持ちを持つことや、望ましい人間関係を築くことが難しくなっているとも言われている。このように、社会環境の急激な変化に伴い、子どもたちの生活の在り方は大きく変容を遂げており、幼児期からの心の成長に様々な影響が現れるようになってきている。

子どもたちの心の問題は、反面、大人たちの心の問題でもある。大人社会にしばしば見られる自己中心的で的な行動や、暴力や性的な情報が氾濫するような風潮が、幼児期から子どもたちの心に色濃く影を落としている。そして、大人社会において規範意識が揺らいでいく中、多くの親をはじめとする大人たちは、確固とした信念を持つ

て子どもたちの心の育成に当たる姿勢を喪失しつつあるという指摘もある。

さらに、文部科学省編の「幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集」を手掛かりにしながら、幼児の道徳性の芽生えと保護者の持つ道徳性の関係、また保育者の持つ道徳性と幼児の培う道徳性の関係を視野に入れ、幼児の道徳性の発達にかかわる基盤となり得るこの時期は大変重要な時期であることを踏まえ、幼児期の道徳性の芽生えがどのように発達していくのかと、相手に対しての思いやりや相手を大切にす

II. 研究の目的

そこで本研究では、それらの研究や主張を参考にしながら、道徳性の芽生えを図る保育の基本である、私も大切、あなたも大切と思いをもちながら、相手に立場にたって人間関係を気付けることのできる幼児を育てる保育の在り方について探ることにした。

仮説1 幼児において、保育者が幼児との関わりの中で、道徳性の芽生えを育む働きかけや関わり、さらには個々を尊重して寄り添う保育を行なえば、幼児たちは道徳的価値に基づいた判断をくだすであろう。

仮説2 共感性と思いやり行動など心の発達共感性と思いやり行動など心の発達をしていく中で、幼児たちが用いた道徳的価値判断基準を分析すれば、譲り合いや他者を大切にすることや思いやり行動認識の発達的変容が明らかになるであろう。

仮説3 幼児の道徳性の芽生えとその構成は、幼児が遊びの中で他者とのかかわりを持つことで始まり、相手への思いやりや大切さを感じることや、自分より相手を思う心の葛藤を繰り返すことが自律への影響を与えているのではないかと。

仮説4 保育者やお友達との人間関係構成能力の発達においては、幼児が自発的に、保育者や友達とかかわることで、いざこざや問題が起こることがあるが、その経験は幼児の協同性に役立ち相手の気持ちを考える思いやりへの気付きとなるのではないかと。

この仮説を検証するために、本研究では、幼児の道徳性の芽生えに関する実証研究として、保育者における幼児へのかかわりを通して検証することを目的とし、次の4つを研究目的とした。

第1に、幼児における道徳性の発達に関する先行研究を明らかにする。

第2に、幼児期における道徳性の芽生えを構成する要素について明らかにする。

第3に、現代の幼児教育において、どのような指導提案がされているか。幼児期にお

ける道徳教育の具体的な指導について明らかにする。

第4に、それらを踏まえて、実際の幼稚園現場での参与観察においての具体的な研究を行なう。

第3章 譲り合いの分析

第1節 研究の目的

幼児がブランコで遊ぶのは、単にブランコがそこにあるという理由だけでなく、ブランコを通してのその幼児の過去の経験も関係する。「代わって」と言われたり、順番を待ったりして交代する行動には、単にそう言われたから乗っているブランコを交代するのではなく、交代したらどうなるのか、代わってと言ったらどうなるのかについての過去の経験があるからである。ブランコを交代するのは、過去のその行動に、順番を待つことや、順番を待っている人を認識したことが伴ったことがあると推測できる。

幼児が、遊びの中で交代しながら、譲り合う遊具のひとつにブランコがある。本研究は、譲り合うという経験をしながら仲間関係を構築し、相手を思いやる気持ちを育む幼児の姿を検討するものである。

その理論的根拠として、本研究は思いやりを相手の立場に立って相手の気持ちを汲む心と定義し、思いやりの精神構造と、その

発達過程を明らかにした平井ら(1991)の研究に依拠している。思いやりの定義としては、幼児の思いやりが育つことによって、自己統制の能力の基盤を身につけ、豊かな人間性を培うものと考えている。

学校教育法第22条(幼稚園の目的)では「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うもの」と明記されており、これは改正教育法の「生涯にわたる人格形成の基礎を培う」ことと符合する。第23条(幼稚園教育の目標)では、具体的目標が5つあげられている。その中の一つに「集団生活を通じて喜んでこれに参加する態度を養うとともに、家族や身近な人への信頼感を深め、自主、自律及び協同の精神並びに規範意識の芽生えを養うこと」と記されている。これは、自らが身近な人々との関わりや、さまざまな集団との関わりを広げ深める体験を通して、道徳性や規範意識の芽生え、思考力や判断力の芽生え、表現力の芽生えを養おうとするものである。つまり、幼児期に人格の基盤となる道徳性の芽生えを育むことが重要な課題である。

未熟な子どもの道徳性の芽生えにおいて、Piaget(1992)は、幼児が他律から自律への発達段階について遊びのルールを意識して実践する発達のプロセスについて考察し、幼児の道徳判断の特徴と思考の発達過程を明らかにしている。

そこで本研究の大きな目的は、幼児期の保育における道徳的意識や規範意識の芽生えについて、それを育む幼稚園生活の中で、幼児が保育者などと幼稚園での保育におけるコミュニケーションを通してどのように道徳性を発展させていくのか、その関わりのあり方を実践記録に基づいて検討し考察することである。今回は、特に多くの幼稚園に設置されており、一度に一人か二人しか利用できないブランコを使っての遊びに注目した。そして、ブランコ遊びにおける譲り合いの場面について観察し、そこから道徳性の芽生えについて分析しようと試みた。

第2節 方法

観察対象幼稚園：東京都私立S幼稚園

調査期間：平成24年4月～平成24年9月
計12回

観察時間：登園後の午前9時位から自由遊びを終える午前11時半までのおよそ2時間半

観察手続き：対象児の言動や表情を、自然観察法により手記にて記録していく。その際に、特に幼児が道徳的なルールを逸脱してしまった時の表情や言動、対象児と他者（お友達や保育者）とのかかわりに注目していく。さらにはその記録を基に、エピソードを注出して、分類と考察を加えていく

とする。

観察における視点は、幼児が他者（お友達や保育者）との関わりの中で、道徳性の芽生えを育む働きかけや関わり、個々を尊重して寄り添う保育を行なえば、幼児たちは道徳的価値に基づいた判断を下すであろう。その中で、幼児たちが用いた道徳的価値判断基準を分析すれば、譲り合いや他者を大切に思いやり行動認識の発達的変容が明らかになるであろう。これらの仮説をもとに参与観察のなかで検証を行うとする。

分析方法：幼児の言動を記録しカテゴリーに分類化する。これは、鈴木（2005）の用いたカテゴリーを参考に幼児たちの道徳的価値判断基準を分析することで、譲り合い、他者を大切にすることや、思いやり行動認識の発達的変容を分類する。そして、思いやりの精神構造と、その発達過程については、平井信義らの研究を参考にする。遊びのルールを意識して実践する発達のプロセスと、幼児の道徳判断の特徴と思考の発達過程については、ピアジェの研究を参考にする。

幼児の道徳的判断の芽生えを育てる保育者の支援と、幼児の道徳性の発達に与えるかかわりの影響に関する研究と、幼児の道徳性の発達に関する先行研究を分析視点として用いる。

幼児の言動の分類化：7つのカテゴリー

幼児の言動を記録し7つのカテゴリーに分類化し、このような分類により幼児が道徳性の芽生えを発達していく経過をまとめた。

- ①：遊びにおける遊び導入期⇒口数が少ない。遊びを模索する。友達を模倣する。
- ②：遊びにおける遊び選択・開始期⇒遊びを決定し、遊び始める。
- ③：保育者を媒介として、譲り合いの機会が設けられ、幼児としての視点を見出す。協調性が芽生えて、友達との関係を楽しみ遊び始める。
- ④：保育者を媒介として、譲り合うことを体得し、自ら実践することが出来る。
- ⑤：遊びにおいて友達関係構成期⇒譲り合うこと、交代を経験する。
- ⑥：自己中心性との葛藤期⇒友達とのもめごとを経験し始める。自分の気持ちが出てき始める。
- ⑦：気付きと他者理解を始める友達関係発展期⇒友達が待っていることに気付け、交代することが出来る。客観性が芽生え、他人から見られる自分がある。本能的な部分が多いが、自分が嫌な気持ちになることに気付き始める。保育者は、それらを実感させるような言葉かけをしている。

観察期間の分類化：4期

第1期 4月13日～5月23日

第2期 5月28日～6月27日

第3期 7月2日～8月24日

第4期 9月3日～10月13日

事例の概要：ぶらんこ遊びにおける譲り合いの分析 その1

対象児：3歳未満児クラスひよこ組の5名
A児、B児、C児、D児、H児

3歳未満児クラスの5名の幼児たちが、園庭にあるぶらんこで遊んでいる。上記した研究目的を追究するために、本研究では、登園後から昼食時間までにおこなわれる園庭での遊びの時間に、担任保育者を中心に保育者とクラスの幼児たちの観察を行った。

ブランコが4台しかないため、5人の幼児たちのうち、1人だけがブランコに乗れず順番を待っている。乗っている4人は、順番を待っているお友達がいることに気付いてはいるがなかなか譲れない。3歳未満の月例の幼児たちであることから、言葉の習得があいまいなこともあり、順番や交代がスムーズに行えなかったり、順番を理解する中で道徳的なルールから逸脱することもある場面に注目していく。

全体考察

幼児たちは、入園したての4月には、それぞれが交代することが出来ず、ただ自分

が楽しむことが精いっぱいであった。2歳から3歳の幼児は、未だ言葉も完全に話すことが出来ない。その為、保育者やお友達との会話を理解しているのかどうかは、行動を分析することで判断するのが最適ではないかと考える。

保育者は、幼児のその場面に対し「貸して」という言葉がけをして、乗れてないお友達がいることと、ゆずれないでブランコ遊びが終わってしまう点に気付かせるよう働きかけていた。交代することを通してお友達への思いやりや、順番を尊重するなど社会的秩序を指導し、それを幼児自らが考えて行えるように働きかけていた。幼児は、保育者の働きかけにより、自ら交代することを学び取り、実際に自発的に交代することができる場面が見られた。

幼児が大人から、ブランコの譲り合いについてブランコは10数えたら交代する遊具と教えられ体得したとする。そのケースの幼児は、大人や親が決めたルールを機械的に覚えただけであり、譲り合うという社会的秩序の理解はしていないと考えられる。保育者は、集団の中でお友達との関わりを通して社会的秩序を体得させていた。保育者の幼児への関わり方が、上からルールを適用させるような働きかけをとるか、または、幼児が自発的に考えて判断し行動できるような働きかけをとるかを比べても、幼

児の道徳的価値意識や社会的秩序の価値幅は大きく異なることが推測される。つまり道徳的意識は、個々の人間の人格形成の体験を基に個人差があるといえる。

ルールに対して、誰かが見てないところでは守れない人、他人が見ているときだけは守れる人など、ルールが何のために存在し、なぜそれを守るのかというその意味や社会的秩序を理解しているのと、そうでないのでは、人間の人格形成の礎となる道徳性を育む過程において大きな差が生じるといえよう。前者の方は、即座にルールが適用される可能性が高いが、社会的秩序の理解は十分ではないと考えられる。後者の方が時間もかかり、保育者の戦略も必要となることが観察からも確認できた。そして社会的秩序の理解や、道徳性を学ぶことが出来るこのような保育者の関わりのあるところが、質の高い保育であると考えている。

幼児のブランコをめぐる行動を観察することにより、幼児が自らの知恵を働かせる姿を確認することが出来た。特に保育者は「こうしなさい。」などの指示系の言葉を投げるのではなく、幼児が自ら考えて自分の意志で譲り合うことが出来る場面があった。保育者の関わりにより、幼児たちに譲り合いの精神が少しずつ育まれていることが確認できた。